

学道一如

発行 小樽双葉高校
生徒会通信
2023年10月31日
第42号

特集▼小樽再発見(7)切り絵カルタ

楽しんで文化・歴史を学ぶ

二〇〇八年に発行された「小樽切り絵カルタ」をご存知だろうか。小樽の歴史や文化、生活の様子や景勝地などを50音の絵札にまとめ、60枚以上のカルタにしたものだ。内外で人気があり、再版を重ね、現在も再版を希望する声が高まっている。これを企画、発行された高田幸枝さんにお会いし、制作の経緯などを聞いた。

郷土愛をカルタに結実

高田さんは駅前の稲穂町の商店街で生まれ育った。高校生の頃、運河保存運動が高まっており、お兄さんたちは運動に参加されていた。「大人のすごい情熱を感じた」が、まだ高校生だったので、参加できず悔しい思い

をしたという。「小樽のことが大好きで何か関わっていきたい」という思いがあったんでしょね」。

四人のチームで

あるとき、高田さんはニュースで、ある町で郷土カルタを作っているのを目にして、小樽でも

制作したいと思った。小学校の恩師である高橋悦郎さんは切り絵を得意としていたので協力を仰ぐことにした。今から16年ほど前のことだ。

絵札の切り絵は高橋悦郎さん、読み札は高田幸枝さんが担当。二〇〇七年12月に初稿が完成し、町内会の行事でお披露目した

(写真左)。子どもたちの反応は上々だった。翌年の2月には北海道新聞小樽支社のギャラリーで「小樽切り絵カルタ作品展」が開催され、好評を博し、カルタ発行への弾みがついた。その後、夫の高田裕也さん(中学校

国語科教諭)の助力を得て、読み札をより読みやすいものに修正し、解説文の作成がなされ、11月に初版が発行された。カルタの箱、読み札、小冊子の装丁は、道内で評判の高い、札幌の須田照生さんをお願いした。

コンパクトな解説書付き

カルタには解説書がついており、小学生にも読めるように漢字にはすべてルビがふつてある。大人にとっても小樽の良さを再認識するきっかけになる内容だ。一つ一つの項目はどれも奥深く、興味を引く逸話がたくさんある。各句、短く解説をまとめるのは苦労だったという。

子どもたちが熱中

カルタを紹介すると、まず学校の先生方が買い、学校で教材として使ってくれた。子どもたちは熱中して取り組んだ。また、小樽のお土産としても喜ばれた。さらに東京小樽会など地元を離れた人にも人気があった。

再版の希望高く

これまで再版を重ねてきたが、「是非手に入れたい」という声も多いため、来春を目標に改訂版を発行したいと考えている。その際、解説文は現状に合わせた内容に変える予定だ。

高橋さん(中央)の前で元気いっぱいの子供たちの声が響いた「小樽切り絵かるた」大会

2007年12月17日北海道新聞より写真を転載

双葉の郷里

このコラムの題は皆さんご存知の校歌の一節からとりました。校名に託された思いを胸に連載していきます。

先日、報恩講の時にご輪番がとても良いお話をされました。そのお話では感謝について述べられていて、なかなか恥ずかしくて感謝を表現できない私たちによく響く内容だったと思います。

ところで感謝には実はかなりの種類があることをご存知ですか。例えば「ありがたい限りです」という表現で「限り」は「極み、上限」のことです。単に「ありがとう」と言うよりも強い気持ちを伝えたいときに使えます。他にも「このたびはお心尽くしの品を賜り、誠にありがとうございます」などがあり、これは「心尽(づ)くし」が相手のために心を尽くすことで「心尽くしのおもてなし」など金品以外のものに対しても使えます。

他にもたくさん種類の感謝が存在しています。感謝の語彙を増やすだけでも細かい気持ちや表現することが出来る。より自分の感謝が相手に伝わります。みなさんもこの機会に「感謝」を考えてみてはいかがでしょうか。そこにあなたが伝えたい感謝の言葉があるかもしれませんよ。

(大塚翔太)

小樽再発見(7)



「小樽切り絵カルタ」を制作した高橋さん(左)と高田さん

高田幸枝さんは読み札を作り、小学校の恩師である高橋悦郎先生に切り絵で絵札を作ってもらった。(2008年11月の朝日新聞より写真を転載)

小樽を住み良い街に

高田幸枝さん

実家が酒屋で、お兄さんはジャズバーを経営し、札幌の中心部にも出店。その店の店長として若い頃から切り盛りしていたという幸枝さんは温かく、行動力のある方だ。ジャズが好きなお主人とそこで出会われ、結婚された。

実は本校にも奉仕活動部のお手伝いのため来校されている。フィリピンのミンダナオ島に支援物資を届ける活動をサポートするワールド・フレンズのメンバーでもある。子育て中は、小樽子ども劇場に参加され、数々のイベントを企画してきた。

11月9日(木) 18時半からの河野康弘(ジャズ) ピースコンサートにも案内してくださった。この方のミニコンサートをご自宅で開いたと聞いた。ユーチューブで聞けるそう。

また、子育て支援の組織「おたるファミリー・サポートセンター」に携わったり、自立援助ホーム・ルピナス小樽の指導員も週一回なさっている。

小樽の少子化も意識している。今、年間400人しか生まれていない。さらに「小樽は今、6軒に1軒が空き家になっている。札幌のベッドタウンとして若い人が空き家に入居し、子育てしやすい環境を整え、人口を増やす必要がある」と考えている。

広く物を見る

力をつけよう

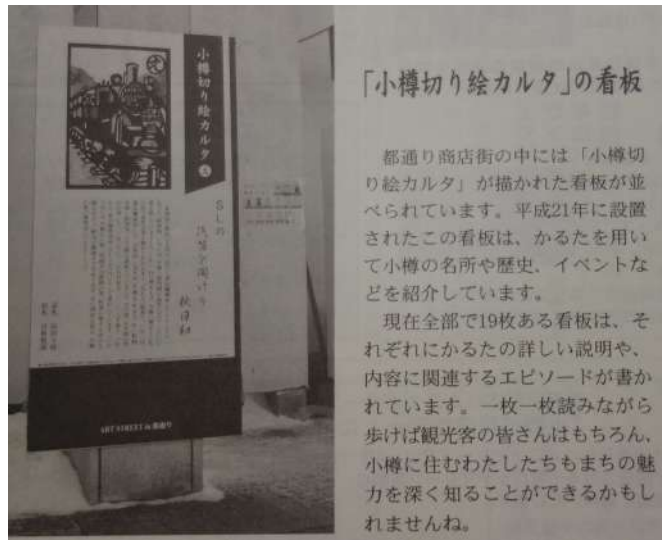
「幸枝さんから高校生へメッセージ」

好きなことをとことんつきつめていってほしい。異業種、様々な年齢層の方、色々な人と付き合っていくてほしい。外国にも行ってほしい。視野を広げてほしい。井の中の蛙にならないように気をつけよう。

【取材を終えて】

パワーをいただいた

大塚翔太



「小樽切り絵カルタ」の看板

都通り商店街の中には「小樽切り絵カルタ」が描かれた看板が並べられています。平成21年に設置されたこの看板は、かるたを用いて小樽の名所や歴史、イベントなどを紹介しています。

現在全部で19枚ある看板は、それぞれにかかるたの詳しい説明や、内容に関連するエピソードが書かれています。一枚一枚読みながら歩けば観光客の皆さんはもちろん、小樽に住むわたしたちもまちの魅力を深く知ることができるかもしれませんね。

看板にもなった切り絵カルタ(市の広報より)



解説書と切り絵カルタの箱。装丁は須田照生さん。プロのお仕事。

取材を通して、高田さんのとても強い地元愛を感じました。カルタを作ろうとした行動力や地元を起こしたいという気持ちが一歩強い方で、運河保存運動に参加できず悔しかつたことや、その後もずっと小樽のことを考えていたそのパワーを身近で感じ、さらに小樽再発見シリーズを頑張ろうと思いました。

小樽切り絵カルタ (1)



あずましく 心を癒やす 朝里の湯

明治時代から温泉地として栄えてきた。スキー場、ループ橋、ダム、噴水など緑豊かなリゾート地として親しまれている。

伊藤整 若き詩人の 住んだ街

小樽を代表する文学者。詩集『雪明かりの路』が認められ、小説『若い詩人の肖像』や『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳が有名。

いにしえを 伝える忍路の 巨石たち

縄文時代後期のストーンサークル。大規模な土木工事をした当時の人の力量に驚く。集団墓地、祭祀的な移籍だと考えられる。

海風に 帆をはらませり ヨット見ゆ

祝津や築港にマリナーがあり、多くのヨットやクルーザーが保留されている。帆を広げたヨットが青い海を進む姿を目にする。

運河行く かもめ海風 人力車

百年前に完成した小樽運河は50年前に半分埋立てられ、遊歩道が整備された。現在は多くの観光客が訪れる人気スポットだ。

SLの 汽笛を聞けり 秋日和

SL(蒸気機関車) この60年間でどんな姿を消していったが、2000年にSLニセコ号が運行し、秋の風物詩となった。

丘に立つ 蟹船の思い 今もなお

『不在地主』『蟹工船』を世に出した小林多喜二は特高の拷問を受け、29歳で亡くなった。旭展望台に文学碑が立っている。

オルゴール メルヘン通りに 音色聴く

堺町通りにあるオルゴール堂本館。一九一二年のルネッサンス様式の建築物。蒸気時計が定刻に汽笛を鳴らす。